

## 日本科学技術者協会 2018年 海外研修 瀋陽

日程：2018年9月7日（金）～ 9月9日（日）

参加者 会員：伊澤、青葉、平山、高橋、中谷

会員外：吉川、及川、斉藤 （敬称略）

日程 往路 9/7（金） 羽田 2：00－ソウル仁川 4：35  
ソウル仁川 8：05－瀋陽 8：55（現地時間）

復路 9/9（日） 瀋陽 10：15－ソウル仁川 13：15  
ソウル仁川 17：40－成田 20：00

宿泊ホテル：Gloria Plaza Hotel Shenyang

訪問先：九一八歴史博物館、旧満鉄本社ビル、中山広場（毛沢東像）、旧大和ホテル、  
遼寧省博物館、瀋陽故宮博物院、北稜公園、張氏府博物館

概要：

瀋陽は遼寧省の省都、旧奉天であり、日本の領事館が置かれている都市です。

例年通りに人材センターから企業訪問先を紹介してもらうことを計画していましたが  
適当な企業が見当たらないということで企業訪問はできませんでした。

そこで今回は歴史を学ぶ事に重点を置いた研修旅行として実施しました。



以下は参加者の皆様からの感想です。

### 【参加者 1】

行ってみなければわからないということが良くわかりました。まず、青空です。新市街（空港と旧市街の間の元農地）は、多数の高層アパートが建っています。旧市街は整備され、大型スーパーで、活況を実感しました。

この地域は、1万年の歴史があり、モンゴル族、女真族、朝鮮族が、草原を馬で疾駆するところだったそうです。この町は、女真族（満族と改名）が設立した清朝初代と第2代の都です。今回は第2代の墳墓に行き、良く保存されていることに驚嘆しました。また、別の場所にある実際の宮殿（故宮）も良く整備されています。故宮隣の張学良（国共合作の立役者、105歳まで生きた）の館（欧風）も訪問しました。張学良の父が張作霖でその館は伝統的な中国式です。

張作霖と言えば、張作霖事件(1928. 6. 4)、さらに柳条湖事件(1931. 9. 18)に発展します。9. 18 記念館は、今回（9月）の目玉でした。

9. 18 記念館の最初のポスターには、「全世界震駭させた重大な歴史的な事件である。それは日本帝国主義の武力による中国征服の始まりだけでなく、世界史の中でファシズム国家が燃やした初めての侵略戦火でもあった。」（原文）とあります。出口の方には、日本と友好を築こうとも書いてありました。

昔の建物も大事に保存され活用されています。満鉄の建物、大和旅館の建物（ここで夕食しました）、大和旅館前ロータリー広場の毛沢東の銅像が健在でした。

今回はガイド（通訳）が、気が利くだけでなく知識豊富で、歴史と最新の状況を詳しく説明してもらえました。皆様の聞き方が上手だったこともあります。

### 【参加者 2】

大変興味深く、歴史・文化ともに勉強になる研修旅行だった。

訪問前の印象では、瀋陽市は経済よりも歴史上の重要拠点であり、過去の都市というイメージが強いものだった。経済規模を確認すると、人口 737 万人、名目 GDP5, 865 億元といういわゆる Tier2 city で、GDP per capita は 70, 722 元（2017 年）<sup>1</sup>。これらの指標の推移を見ると、2013-17 の CAGR は人口+0. 3%、GDP-3. 6%と、成長に乗り遅れた東北部を象徴する都市と映る<sup>2</sup>。一方で、歴史面では清の最初の首都、および張作霖・張学良の本拠地と、重要性は言うまでもない。ちなみに、観光ガイド「地球の歩き方」では大連・ハルビンとセットの書籍となっており、少なくとも日本人にとってはあまり人気が高そうに見えない。

果たして、実際に訪問してみると都市としての近代化の進展ぶり、特にクリーンさが際立っていた。空港から都市部へ向かうと、上海などの大都市と同様にマンションが立ち並んでいる。どの程度の入居率なのかは謎だが、とにかく似た様な高層マンションが並び続けている。歩道に目を移すと、植木は高さを揃えて刈り込まれており、路上は落葉やゴミもなく極めて綺麗な状態である。なお、駅前には 5m おきにゴミ箱が置かれており、政府側が意欲的に美化を進めていることが窺える。

観光では、張作霖・張学良の人気振りが印象的だった。日本による支配に関係する観光施設としては、9・18 歴史博物館および張学良邸へ訪問した。前者は 9 月の訪問だったこともあり迷彩色の服を着た 10-20

代と見られる軍関係者のグループが研修で訪れているのが目についたが、後者は若い中国人達が観光で多く訪れており、張学良の銅像や邸宅内で快活に写真を撮っていた。邸宅にはかつて実際に使われていた物品が置かれており、確かに当時の風景が偲ばれるものの、何か新奇性がある訳ではない。にも拘わらず若者がこれほど訪れているということに、強く驚きを感じた。彼らの会話内容が分かる訳ではないが、表情からは悲壮感を感じられず、ナショナリズムというよりも地元のヒーローとしての人気、という様に思えた。

もう一つの歴史的テーマである清については、ヌルハチの墓陵を訪れ、当時の統治体制について話を聞いた。墓陵は盗掘されぬまま保存されており、近年になって入り口の石壁を削りマイクروسコープを入れて内部を観察することを試みたが堅固なガードに結局諦めたようだ。ガイドのコメントによると、清代では大多数である漢民族を支配するために言語・文字を取り入れて統治を行ったとのこと。ヌルハチはさほどでもなかったが太宗は言語・文字共に大変上手に使いこなしたようだ。支配体制を築くために必要な一手ではあるが、一方で言語・文字を取り入れる / 合わせることは思想や文化を失うということでもあり、民族的に吸収されてしまうリスクをはらむ。少数民族による支配はどの程度融和策を取るかが難しい。

瀋陽という仕事ではまず訪れる機会の無い都市であり、歴史・文化両面で考えさせられる良い機会だった。企画・運営に携わった皆様に御礼申し上げます。

1. “JETRO 瀋陽市概況”
2. “JETRO 瀋陽市概況”より算出。GDP は 2015-16 年で-5.6%と大きな低下が見られ CAGR にも影響していることに留意が必要

### 【参加者3】

2018年の日本科学技術者協会の海外研修は、中国東北部の遼寧省瀋陽市訪問であった。これは2002年に第1回目のテクノ未来塾中国研修を始めてから数えて16回目となる。

瀋陽市は、16世紀末に挙兵した女真族のヌルハチ（清国初代皇帝）が首都と定めた地で、1636年に清国の首都となり、1644年に北京に遷都されるまで続いた。この地に初代と二代目の皇帝の墓がある。20世紀前半に日本が建国した満州国の第二の都会で「奉天」と呼ばれており、南満州鉄道（満鉄）が本社を置いていた。

今回、研修としては初めて訪問した瀋陽についての感想を、実際に訪問した先別に歴史的な繋がりなどを含めて記すことにする。毎晩、眠い中での夜の研修については、皆さんの感想にお任せする。今年の研修に付き合ってくれた現地ガイドの王さんは、歴史・文化に詳しくそれぞれの場所に相応しい解説を入れて下さったのは望外の収穫であった。

918記念館：日本では満州事変（柳条湖事件）と呼ばれている昭和6年9月18日に起きた事件に焦点を当てた記念館である。中国側では「日本陸軍による植民地支配」の始まりと位置付けていて、その立場での展示になっている。歴史的な出来事を事細かに写真で示し、詳しい説明を施している。この記

念館は 1996 年の開館であるので、私が訪問した 24 年前には存在しなかった。展示は将来の中日関係の豊かな実りに結び付けようとの意図も感じさせるが、殆どの部分は日本陸軍によって痛めつけられる中国人の写真である。

中山広場：昔の奉天（瀋陽）駅前広場でよく整備された観光の中心である。その中心に大きな毛沢東の像が右手を上げる独特のポーズで立っている。実は私は 24 年前に一度瀋陽を訪れたことがあり、唯一記憶に残っていたのがこの毛沢東の像である。当時の瀋陽は高いビルディングなどは殆どない平らな街の印象だったのが、市内全域に高層ビルが林立する都会に代わっていてびっくりした。今回の観光訪問先が市の南部の郊外と北部、中央部にあったのでバスでの移動で何回も高層ビルに囲まれている道路を通り抜けて走った。

ヤマトホテル遺址：一日目の夕食の会場であった遼寧賓館の別名で、昔の満鉄直営のヤマトホテルがそのままホテルとして使われているものである。中山広場に面して建てられており、現在は外壁の再修復工事の最中でグリーン網に囲まれた部分が多かった。しかし、内部には古い物も良く整備されて残っており観光資源としての活用もされている。

遼寧省博物館：巨大な 3 階建ての大面积を誇る新設の博物館である。2010 年の上海万博で中国政府が力を入れた「歴史的に見た中国の大国としての力の誇示」の地方版の一環といえる。近年、各省、地方自治体がこうした博物館を次々に建設してその地方の歴史と偉大さの誇示を競っている。今回見た感じでは、展示は未熟であったが遼寧省の古代から現代の最先端までを各室に分散展示する形になっていた。充実していたのは満族（女真族改め満州族からの改名）民族展の会場であった。流石に地元の一族の展示で一際、見応えを感じた。

北陵公園：清国二代目皇帝の墓地とその前庭を中心に公園として公開されている観光地である。初代皇帝のヌルハチの墓地は東陵と呼ばれて、遙か東方の郊外に設けられているが、二代目の墓よりもかなり小さい。大正 10 年に満州日日新聞社から刊行された「満州写真大観」の中にも北陵公園は紹介されている。今回、皆で集合写真を撮ったのはこの北陵正門前だったことが判った（添付の写真参照）。

瀋陽故宮博物館：女真族が建国した後金国（後に清国と改名）の皇居（城）の跡が記念博物館となっているものである。広い敷地の中に数多くの建造物が保存されている。大政館が観光の最大の目玉として知られている。残念ながら、今回は修復工事中で板塀に囲まれていて屋根の一部分が目に入っただけであった。上に述べた満州日日新聞社から刊行された「満州写真大観」の中にも「城内の写真」として故宮博物館の建物や庭が紹介されている。

張氏記念館：清国の滅亡から中国共産党政府の樹立までの中国国内の混乱に巻き込まれた張氏一族の内、張作霖、張学良父子の館を記念館としているものである。張学良は現在の共産党政府の成立に大きく寄与した功績による将軍としての大きな銅像が建てられている。張学良の記念館（西洋館）ではその外観や周辺が、ドローンの操縦によって撮影されている現場に立ち会った。

#### 【参加者4】

瀋陽はこれまでに行った事のないところであったのでとても楽しみにしていました。

日本の領事館もある都市であることは知っていたので、交通の便も良かろうと思っていましたが実際には直行便は少なく往復とも韓国仁川経由となりました。9/6 深夜に集合し9/7 朝到着となり体力的にはきついですが初日は時間的余裕ができました。

事前の下調べで満州鉄道の機関車アジア号が2両保存されている事を知り見学を希望しましたが中国の鉄道関係者にしか公開していないということで見る事はできませんでした。

(替りに旧満鉄本社ビルを見る事になりました。)

九一八博物館はさぞ反日的宣伝がされていると思いきやそうでは無く、これが中華民国の大事件であったこと、中日ともに現在は平和を望んでいる事を強調していました。

北陵は中国で唯一盗掘も学術調査も入っていない完全に保存された陵墓であるそうです。当然中の地下宮殿は見ることはできません。

歴史的建造物、博物館を巡ることで現地に行かなければ判らない事がよく分かりました。

瀋陽の街は空が青く、ごみも落ちていない綺麗に整備されていたことが印象的でした。古い下町は残っていませんが歴史的建造物はそのまま残されています。北京や上海のようなファミマやセブン系列コンビニがないことも特徴です。

訪問した9月上旬の気候からは住み易そうな所という印象を受けましたが、夏は40度を超えることがあり、冬はマイナス25度くらいまで下がるので年較差70度近い大変厳しい環境にあるそうです。

いつものように朝はホテルの周りを散策しましたが、一般市民の集合住宅の作り(駐車場の場所)が北京とはまるで違い、日本に似た印象を受けました。

バスガイド(王軍さん)が非常に話し上手で知識も豊富であったことが旅を盛り上げてくれました。街中の交通マナーもとても良いように見えました。ガイドの説明では交通違反は監視カメラで即検挙され反則金が自動的強制的に口座から引き落とされる仕組みがあるということでした。つまり罰金の請求書では無く、いきなり領収証が来るということです。

瀋陽は親日的な所であり、現在は日本語学習のブームにあるとの紹介があり行って安心な街でした。



#### 【参加者 5】

今回、3年ぶりの中国研修旅行であり、これまで以上に新鮮な印象を受けることが多かった。やはり、継続して参加することで、得られることは多い。

瀋陽は、中国で13位の大きさの都市であり、市街地の人口が636.5万人とのことでした。旧市街と新市街があり、新市街の開発が進行中であることがうかがえた。これまでの研修旅行で訪問した都市との大きな違いは、街にゴミがほとんど落ちておらず、綺麗であった。そこら中で掃除をしているおじさん、おばさんに会うことができた。

新幹線の発展はすさまじく、瀋陽市内の大きな3つの駅（瀋陽北駅、瀋陽中央駅、瀋陽南駅）それぞれに新幹線が乗り入れている。北京まで、新幹線で4時間とのことであった。地下鉄も走っているが、建設工事も推進中。市バスが市民の足であるものの、世帯数の37%が自家用車を保有。

満鉄統治の名残がある中山広場には、毛沢東の銅像がそびえていた。毛沢東の周囲にいる労働者一人ひとりの表情が生き生きとしており、銅像建造技術の高さがうかがえた。中国の都市のすばらしさは、ヤマトホテルや満鉄本社のように、古き良きものを文化財や博物館としてだけでなく、うまく活用していることである。日本も見習うべき点と考える。中山広場だけでなく、市街地には、電柱や電線がなく、スッキリした街並みである。中山広場では、凧揚げをしているおじさんがいた。

スーパーやコンビニでの二次元バーコードでの支払い、アリペイ等が経営しているレンタル自転車（複数メーカー目撃）、ニュースで見ていたものが、瀋陽の街中にもあふれていた。

中国の方が博物館に入場する際にも身分証明書の提示が必要で、その理由がテロ防止であること、以前、瀋陽の日本領事館に脱北者家族が逃げ込んだ際の映像を撮影した家を中国当局が同定し、一週間も経たないうちに強制立ち退き+公園に変わったとのガイドの説明は、実際の中国のある一面を伺うことができた。

夜の勉強会で一番印象的であったことは、中国が多民族国家であり、他民族を支配するために、「言語」を使わせないようにしたことであった。これは、ユダヤ人のように、言葉を守ることで、国はなくても民族を守ることができ、2000年経って、祖国を持つことができたことと繋がっていると感じた。

おまけ。夜行便+仁川空港乗換の工程は、ちょっときつい印象でした。来年以降、行先を検討する際には、直行便（できなければ、深夜発の工程は外す）で行けるところで考えた方がいいと考えます。

#### 【参加者 6】

瀋陽は青空でした。

満州事変（1931年）の9.18記念館。

大学新入生の3カ月の訓練で男女とも迷彩服を着て見学に来ていた。

所謂、小皇帝、小公主世代でしょうか。

途中の展示に出てきた中国の国家義勇軍行進曲の作者の聶耳（ニエアル）

は1935年に神奈川の鶴沼海岸で遊泳中に亡くなっていることから、

海岸の公園に聶耳記念碑が建てられていたり、出身の雲南省昆明市と藤沢市が

姉妹都市になっていたりします。

<https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/jinkendanjyo/kyoiku/bunka/toshikoryu/shimai/chugokukoka.html>

満州事変後に日本に遊びに来て、海水浴中に亡くなっている訳ですが、9.18 記念館の展示内容を考えると、彼の来日が結びつきませんでした。  
(もう少し、この辺の歴史は知っておきたいなぁと感じました)

中山広場ロータリーの中央にたたずむ毛沢東像。  
車の流れが絶えない中、ロータリー側に渡れる気が到底しなかったのですが、「みんなで渡れば怖くない、そして走らない。慌てない」で見事に渡ることができたことに感動。毛沢東を囲む人たちの像の妙な躍動感も印象的でした。

中山広場に面する大和ホテルは、大連よりも綺麗に維持されている印象でした。宿泊した著名人名簿、蒋介石は敵側。初日の夕食をいただきました。

二日目の朝は、初日の中山広場から見えていた瀋陽駅（旧奉天駅）まで摂取したカロリー消費も兼ねてジョギング（10km くらい）。瀋陽駅はレンガ造りで辰野金吾の弟子の設計だとかで、確かに外観は東京駅に似ていましたが、ドーム状の屋根が妙に明るい緑色で、やや安っぽくも見えました。



瀋陽故宮、財宝はほとんど台湾に持っていかれた。

ホンタイジの墓が封印されたまま残っている。周辺の水銀濃度が高いらしく、もしかすると腐食せずに諸々残っている、というのも驚きました。

張作霖張学良の旧邸宅

張作霖が伝統的な中国式の邸宅だったのに対し、張学良はドイツ式の石造り。



張学良邸は地元 TV 局がドローンで外観を撮影していました。  
共産党体制の中国の黎明期に関わる街でもあり、  
この辺の歴史が、個人的にあまり整理できていないので、  
機会を見て少し勉強してみたいと改めて思うきっかけをいただきました。

おまけ)

宿泊したホテルで「新幹線外国語学校」の説明会？に結構な人数が並んでいた。  
日本語を勉強している中国人が3000万人、そのうち日本人よりも多くなるかも（ガイドさん談）  
は、どこかで話のネタとして使わせてもらおうと思いました。

#### 【参加者 7】

今回は、2 回目の参加でした。前は、青島で、ドイツ色が強いことと、海岸沿いであったせいか、明るく開けた感じでしたが、今回の瀋陽は、内陸に、古い町と新しい町が隣り合っている感じで、イメージの中国に近い感じでした。  
特に、博物館の中の展示物とか、中山広場、北稜とかを見ると、中国の文化を感じられた。  
今回、満鉄に入れたのはラッキーだったと思う。  
ただ、新市街地は、やはり、中国の今の成長を物語るように、高層ビルが立ち並び、中国らしからぬデザインの建物もあり、恐怖を感じるくらいだった。  
今回は、残念ながら企業見学ができなかったが、今後も中国は注視する必要があるとおもう。  
追加で、世界遺産がたくさんあってうらやましい・・・

#### 【参加者 8】

研修に参加させていただいて4年目になります。それまで（何となく少し怖いイメージもありましたので）中国本土には行ったことがありませんでしたが、なかなか見られない場所にも連れて行っていただいたり、大きな変動期の中国の実態を肌で感じる事が出来ましたので、参加させていただいて非常に良かったと感謝しています。

私は歴史が大好きなので、遼寧省博物館、北稜公園（清の2代目皇帝ホンタイジの陵墓）、旧満鉄本社、瀋陽故宮博物院、張氏記念館、旧ヤマトホテルと、もう夢のような旅程でした。九一八記念館はちょっと重たかったですが・・・。  
遼寧省博物館は新しくて広く、かつジオラマを多用した凝った作りとなっており、貴重な古代遺産とともに見ごたえがありました。何となく、経済的躍進の次は民族の誇りを誇示したいという強い思念のような躍動感のようなものを感じました。ただ、目立つ遺物を主体に飾り立てるような展示の仕方に稚拙感というか文化に対する姿勢が未だ途上にあるのかな、と感じるところがありました。  
北稜公園はとにかくスケールが大きい。しかも発掘を禁止し、地下には皇帝陵墓の財宝がそのまま眠っているとのもので、ロマンを掻き立てられました。まあ、建物の装飾などは日本の古代建築と比べるとどことなく雑な作りでしたが、とにかくスケールが大きいので



そうしないと作り切れないんだらうな、と妙に納得しました。

瀋陽故宮博物院はやはり広さに圧倒され、大陸は土地に余裕があるところが何ともうらやましく感じました。ただ、一番奥の城壁の更に奥に石積みの大きな壁があり、未だ奥があるのかと驚いたのですが、実は遺跡っぽく作ったスーパーマーケットの壁と聞いて笑ってしまいました。

張氏記念館は張作霖の中国風居館と息子の張学良の洋風居館が並んで立っていることに激動の時代の過渡期を思わせて興味深いものがありました。本来は共産党と敵対関係であると思っていたのですが、張学良が実質的に（平和裏に）降伏した形で（監視付きの）賓客扱いとなり歴史資産として保存されるに至ったと初めて知りました。また歴史的建築物や見学者がたくさんいる上空に平気で大型のドローンを飛ばして撮影をしていたのが印象的でした。旧満鉄本社や旧ヤマトホテルは中国鉄道事務所や迎賓館として活用されており、当時の日本建築の優秀さを感じるとともに、日本人が気楽には入れない雰囲気や九一八記念館の抗日プロパガンダと似た感覚を醸し出しているようなところが少し残念でした。

瀋陽の人は個人的には反日感情が少ない方（案内の方から、満鉄時代や戦後の日本企業進出で日本との関係は比較的良好な方で、数年前の日本車焼き討ちの時も瀋陽では暴動などおきなかったという説明があった）とのことでしたが、政府方針の影響も大きいと思われるので、今後民間交流を通して友好な状況が拡大していけばいいのだが、と思いました。

また来年もぜひ参加したく、楽しみにしております。



以上